半田正夫出征記

死にいく兵士の身から、後続の兵が必要とする物を剥ぎ取っていく。軍靴であれ、軍帽であれ、はたまた、軍袴であれ、生きている者の利便に供される。取られる側には、すでに覚悟のようなものができていて、虚ろな眼差しで、なされるままに、体を横たえている。もはや、抗う力もない。

その兵士が、最後の筋力を絞り出して、飯盒を抱きかかえた。取られまいと構える。食への執着は生へのそれでもある。「いまでも、あの光景は忘れられん」と、語り手は額に深い縦皺を寄せた。

「忘れられん」記憶は、他にもある。敗戦後、空腹に耐えかねて収容所暮らしをしている最中でのことであるが、自分が捕まえた野ネズミを他の者に食べられてしまった口惜しさや、三日間の漂流の後に救助されて、最初は重湯を与えられ、何日かしてから、「明日からは平常食を食べてよろしい」と、言われたその「明日」に、再び、海に投げ出されたときの無念さである。魚雷にやられて、海上で生死をさまよっているはずなのに、「朝飯を食べてからなら、思い残すことはなかったが」と、いまでも夢に見ると言う。後の二話はユーモアたっぷりの語り口に終始している。

前者は他人の姿を語り、後者は自身のそれを取り上げている。そして、その二者は独立した記憶箱に収納されていて、破顔と苦渋顔とが入り乱れることがない。

灼熱地獄の記憶にしても同じ収納法を採っている。高温多湿の気候が、体に傷ができるのと同時に、ウジが湧く。斃れていく兵士を三日も放置しておけば、白骨と化し、誰が誰なのか、認識票を手にしなれば分からなくなる。生死を共にした仲であれば、その変わり果てた姿に無感覚ではいられないはずだ。

一方で、語り手は炎熱がもたらす恵みを、「してやったり」と喜んでもいる。水牛の生肉をスライスして、トタンの上にでも置いとけば、半日でカラカラの乾燥肉ができて、腐敗することのない携帯口糧となり、兵士を飢えから救ってくれる、と言う。

語り手は、自身が身を置いている今を、奇妙な時代、とは少しも思っていない。「男なら、兵隊に征くのは当たり前」という時代風潮が知らずのうちに血肉化されている。同時に、その「兵隊」が任務遂行のためならば、あらゆる行為は正当化されるのだ、という論理を自身に植え付けることができないままであった。

そのあらわれとして、刈り入れ直前の稲穂を潰して進まなければならない軍事演習に割り切れない想いを抱く。また、実戦の場でも、呻吟する姿を隠さない。戦場で食糧の支援が絶たれて、その不足を補うために現地民から徴発したブタを持ち帰ろうとしたさいに、「子どもの大切な食料だから」と、若い母親に泣きつかれて、ブタを手放してしまった。そのとき、上官から咎めを受けたのかどうかは聞き漏らしてしまった。

こんなとき、他の兵隊ならばどんな振る舞いにでるのであろうか。ここに、ひとりの学徒兵の手記がある。その兵は手帳の中でこう叫ぶ。「・・・この一年間僕は何もしなかったと！鍵をかけられた精神！命令に追従しただけの肉体！」「・・・そうした内面のまえでは、『軍人勅諭』も『戦陣訓』も、何の方針も効果もなく、小学校の修身と変わるところがない」。「軍人の本分は何と形式的で低級だったことだろう」と、軍隊そのものの脆弱な体質に迫っている。この兵は、「男なら、兵隊に征くのは当たり前」という覚悟とは無縁の世界に生きていた。

それが、生きるための論理を自分で築かなければすまされないと観念したとき、迫り方が変質していく。「青年の一部だけが兵士となる時代ならばよかったであろうが、いまは、青年の全てが兵士になるのだから、兵士の務めは軍人であるまえに、世代で」あり、「国家を背負うべき青年層としての務めを、兵士であるがゆえに怠ることは許されない」と、真っ正面から、脆弱な軍隊に立ち向かっていく。苦悶そのものである。

これは中支の河南省で、陸軍中尉として戦死したひとりの学徒兵の手記である。正確には、学徒出身兵とでも言うのだろうか。大学研究室に勤務し、妻帯している二七才の兵であった。（松永竜樹「従軍手帳第一部」『きけわだつみのこえ』所収）

半田氏がこの学徒兵と違うのは、軍隊そのもののありかたに対して疑問を抱く前に、いかにしたら優秀な兵になれるのかということに心血を注いでいた。自分たちがかかわる戦いが、アジアやアフリカの白人コンプレックスを覆し、独立運動を支援しているのだ、と言う教えも受容している。たしかに、その姿勢は日露戦争の際には顕著であった。だから、白人の側では黄色い肌の武力に脅威を抱き、「黄禍」というコトバまで生まれたほどである。ところが、その三〇余年後の太平洋戦争では、いまだに「白禍一掃」のスローガンを掲げてはいたが、内実は侵略行為のなにものでもなかった。日本は白人が辿った植民地支配をなぞるようにして、アジアの国々へ出兵していったのである。

半田氏は、日本軍の行動はアジアの人びとが求めていると確信していたから、連合軍の包囲のなかかで、日本が原油備蓄のままならない現状に陥ったときに、ジリジリと干上がっていく水源地を目の当たりにする思いに駆られている。氏は兵役を全うせんがために、あらかじめ虫歯を治し、銃剣術に励んでいる。が、その忠誠心は軍そのものにではなく、直属上司へのそれであった。

その姿勢は復員後も一貫していた。復員軍人のなかには、時間経過の中で、「同期の桜」を高吟し、戦友意識に没入する者もいた。だが、半田氏にはそうした振る舞いが見られない。ただ恩義だけは忘れない。大時化のバシー海峡から生還できたのは、分隊長のお陰である、と、信じている。『軍人勅諭』の五ケ条の内、三条目の「軍人は信義を重んずべし」は、いまも本人の座右にあり、肉体となっている。四十三年ぶりに分隊長の居所を突き止めて面会に向かう語り手は、命を分かち合った恩人へのお礼参りであった。

語り手にとって、歴史は煩わしいものではなくて、忘れられない記憶の連続であり、しかも、少しの歪曲も許すことなく、記憶の引き出しの中に整理保存されるべきものであった。実戦をくぐり抜ける中では、立ち止まる余裕がなかったのは事実である。上官の命令に忠実であることを旨とする最下層兵には、忙しく立ちまわることが、何よりも求められた。意味のあるニュースに接する機会も閉ざされたままである。だからといって、多忙や情報不足を理由に、事実が歪曲されてはならない、と恐れている。氏は、細部の観察も怠らない。

収容所では、初め重湯のような飯米をあてがわれていた。桶から掬って、ひとり一ぱいずつ分ける。少し残ったら、こんどはサジで掬って分ける。サジで配るほどもなくなったら、桶の周りに、ノリのように付着した重湯を、指でこすり取る。全部配り終えても、誰も食べようとしない。コーヒー色をした湯を、茶代わ

りに、めいめいが、腹いっぱい飲む。その後に食べれば、わずかな食事量でも満腹感を味わうことができるからである。それでも、誰も、食べようとしない。一番最後に食べたら、人より余計に食べたような気がするからだ、と語り手は観察している。息を殺した内面の凝視が、この描写をもたらしたのである。

語り手は、終戦の語は使っても、敗戦の語は一度も使っていないことでも、歪曲から遠いことが分かる。負け戦の語が出てくるが、これは敗戦とは違う。継続中の戦いが劣勢であることを表現しているに過ぎない。

終戦を知らされるが、その瞬間に力が抜けて、歩けなくなってしまった。それが勝利なのか、敗北なのかは知らされていないのである。上部の人間たちは、勝つためのいくさを企てたであろうが、語り手はそれ以前に、上官の命令に、どれだけ実をもって従えるかを試している。最下層の兵は戦争の全体像を知らされないまま、日々の雑務に忙殺されていたから、終戦の一語は、張りつめていた気力を瞬く間に萎えさせた。この部分の語りでも、曲げられたものは、何もない。だから、終戦を迎えても、語り手には後ろめたい気持ちはなかった。

それと好対照なのが、作家の故島尾敏雄氏である。特攻隊の長として生き延びたのだが、戦後に生きる理由がつかめずに、後ろめたい気持ちが消せなかった、と本人は言う。氏は異常体験の意味を日常の中で問い続けることで、その後の何十年間かを過ごすことになる。

後ろめたさを野戦生活のただ中で体感している人もいた。先の『従軍手帳』の著者がそうである。幹部候補生として、見習士官を拝命したときから、兵と将校との間の越えられない一線を実感する。兵であったときは、「（任務への）消極と偽装は論理的であった」が、今後は「僕の方針は変更を要求される」、と告白している。その変節を超克しようとして、「今まではできるだけ”殺すまい”として生きてきた。これからは”殺そう”と意志するのだ」。それだから、今後は、「（いままでは）生きて帰りたいと思い、在隊中の時(とき)は”数えまい”とした。今は死のうとしてすべての時を数えるのだ」、と。兵を先に死なせ、将校が生き延びることを許さないのだ、と自らに言い聞かせ、後ろめたさを押しつぶす。

以前、わたしは半田さんに山本七平氏の『私の中の日本軍』を送ったことがある。そうしたら、すぐに電話連絡が入った。その張りのある語気はいまも耳底に残っている。「将校と、われわれみたいな下っ端の兵とは、体験が違う」の、ツバが飛んできそうな大きな声に、一瞬、受話器を耳から遠ざけた。将校の内面のうしろめたさは、兵には伝わらない構造になっている。先の語気は、『戦艦大和ノ最期』を著した吉田満の書を送っても同じだったかもしれない。『俘虜記』の大岡昇平に至って初めて、わたしは受話器を耳に着けたまま交信できたのだろうか。

収容所の暮らしも一年以上が過ぎ、体力も回復してきて、日々の楽しみも覚えた。監視の眼を盗んで食べ物を手にいれるのだが、「日本人が悪いことをする、て言うたら、それこそ徹底的にやりよった」と、朗らかに語る。日本人の要領の良さを自負している。これは、多分に相手国のアメリカを意識しての語りである。盗みが一種のゲームとなり、監督する側の人間を困らせてやろうという、たわいなさがある。そのことは、収容所に捕らわれた者たちの憂さ晴らしなのだが、「楽しかった」と、表現している。収容所を含め

て、語り手にとって、戦地体験は、ひとつの青春であった。それは、文字通り命を賭けての青春である。

歪みのなさは、どこに身を置いていても、一貫している。日本本土に向かう復員船の中で、食事にタクワンが出され、何年ぶりかの食材にお目にかかって驚喜する姿や、救助艦の上で、平常食が許されて、茶碗を叩いて踊り出す姿は、他者が自分をどう見ているかという、恐々としたところを微塵も感じさせない。将校や古参兵とは違って、自らの虚像を作る隙間もない、最下層兵としての日常が、自然な振る舞いを取らせたとも言えるが、天性の質に負うところも多い。「嫌じゃ」と思ったことには、どうしても背を向ける自分を、「一本気」とか、「変わり者」とかのコトバで表しているが、反対に「好きだ、嬉しい」と受け取った対照には、とことんつき合う。四十三年の空白を超えて分隊長に抱きつく姿は、戦友としてではなく、人間としてである。

語り手は大正一二年生まれだから、本年・二〇一二年で八九才になる。チェンソーで足にケガをするまで、ということは七〇才過ぎまで、学校の鉄棒を借りて器械体操を楽しむ人だった。ケガが癒えた現在は健康そのものである。並はずれた記憶力と、底抜けの陽性さ、信義に厚い気性、それと、なによりの特性は、語ることが好きなことである。

わたしは語り手と初めて会ったのは昭和四十二年の一月であった。西暦になおすと、一九六七年であるから、四十五年前ということになる。四十代なかばの半田氏は、はち切れる元気さで開拓農家を導き、サトウキビ栽培に精を出していた。一方では、村会議員として、走り回ってもいた。語り手の住む島は、鹿児島県鹿児島郡十島村、俗に、トカラ諸島と言われている島々なのだが、その諸島の中心島とも言える中之島である。

そのひとつ南に浮かぶ臥蛇島が昭和四十五年に無人島になった。わたしはその島に一時的に住んでいたのだが、無人島になる経緯が充分にのみこめないまま、在来島民と共に離島した。無念の思いを抱いて先祖の墓にしがみつく島民の姿に、わたしは釘付けになっていた。そこには、慣れ親しんだ大地を離れて、都市に流れ出る流民一世の生々しい姿があった。その仕草からは、慶応四年（明治元年）生まれのわたしの祖父が味わったであろう感慨が迫ってくる。若狭の貧農の十一男坊に生まれ、耕す土地もなく、軍隊に入れば飯が食えることを知り、生涯を下層兵として他郷で生きた人である。

わたしは、百年の時間差を取り払って、ふたつの流民劇を重ね合わせていた。ドラマには迫力があり、これはきっと時代を超えた人間劇なのだろう、と勝手に捉えていた。いまから振り返れば、かたずをのんで、その現場に立ちつくしていたことは、わたしにとっては、かけがえのない瞬間であった。

この瞬間を誰かと共有したいという衝動を抑えられなくなり、この本文の語り手である半田正夫氏に短い便りを送った。誰に送ったらいいのか、その選択は本能的な嗅覚に頼るしかなかった。二十歳をいくつか過ぎた若造にとって、事を解く力もなかったし、また、語り相手を選択するといっても、それほど広い領域が許されてもいなかった。頼るのは直感だけであった。

返信が来た。「あなたと同じで、第二の臥蛇島があってはならないと思う」とあった。当人は村議会の主力議員として、無人島化を推進する側にいた人である。わたしは、返信内容に矛盾がないか、そして、差し出す先の選択を誤ったのではなかったかと、自身の選択領域の狭さを呪っていた。

語り手は戦争を全面否定してはいない。同時に、肯定もしてはいない。ヘビに睨まれたカエルのように、相手の火器から逃げ迷う自分を、「哀れなもんですよ」と、表現するのだから、従軍生活をもう一度味わいたいなどとは思ってもいない。

同じように、餓死寸前にまで追い込まれた臥蛇島民に、離島を決意させたことを、半田氏は最善の策と自認する一方で、個々の島民の苦渋を推し量ると、二度あってはならないことと言いきる。それを矛盾した論と決めつけるのは、ふたつの独立した事象をひとまとめに括って語ろうするからである。それをするなら、どちらかを、あるいは両方の事象を少しずつ曲げなければすまされない。それはできない相談だ、と半田氏は突っぱねる。全員離島の推進と、第二の臥蛇島を出さないこととは別の事柄として、半田氏は捉えている。

学徒兵の手記も半田氏の語りも、ともに真摯であり、ふたつをすり合わせるとしたら、それは互いの想いを深めるための反射鏡の作用を期待することであって、協和させる利はどこにもない。

人の運不運は人知を超えて存在する、と、くり返し説く。語り手が訴えているものは、自分の肉体に刻んだ記憶を、憶測を借りて、曲げてはならないということである。その記憶の詳細を語り続けることで、真実に迫ろうとしている。氏一流の表現法といえる。わたしは、半田氏への投函は間違ってはいなかった、と、いま思う。

資料１

氷川丸。昭和五年に横ハマドックで日本郵船が建造した、一万一六二一トンの客船。北米シアトル航路に就航した。戦中は病院船として、そして、戦後は引き揚げ船として走った。半田正夫氏の証言にあるような、武器輸送船としての一面は語られていないのではなかろうか？

参考：高橋茂『氷川丸物語』

資料２

『安東分隊長殿の頼り』と表書きされた封筒を半田氏は蔵していて、そのなかに元分隊長からの便りが収められていた。半田氏は、「戦後四三年目の便りです」というだけで、投函の日付はわからない。四三年目は一九八八（昭和六三年）である。

「立春の候

ＮＨＫの御陰で戦友一人を発見することが出来ました今の所でＮＨＫ様々です。半田さん先日来より懐かしい電話の声や手紙を戴き四十二年前の事が走馬燈の用に思い出されます私もあの悪夢のバシー海峡で二晝夜漂流して運良く助かった三人の一人それが御互いに住所も別(ママ)からず別れ別れになったのですからこれも敗戦が目前に迫り生きて故郷の土を踏めないと思ってお互いに住所も知らせなかったのですね私達が現役当時の戦友会をして居ますが当時は戦勝(マ)戦勝(マ)の時代で鹿児島でも二回やりましたよ三十名ぐらい集まるが戦勝して居るときは生きて帰れると思って御互いに住所を知らせ合って居る故お互いに住所が別かりますから楽に集合出来ました半田さんと二人は奇跡に助かったのにおたがいに住所も別らず近くに来て居ても逢ふ(ママ)事も出来ずに本当に残念でしたでもテレビの御陰で半田さんの近況を知る事が出来ました次は大分か鹿児島で逢える日を希望して居ます

半田さんも復員後は随分と御苦労が有りました様ですな苦有れば楽ありでもう子供さん達も立派になって居る様だし村の役もほとんどやりこなして来たしのんきに過ごされて居る様に見えますもし逢う事が出来たら徹夜で話しても語りつくせないでしょう

半田さんは私より五才下ですからまだまだ元気でしょう私は七十才だよでもまだまだ元気で漁業に精を出して居ます健康の為ですが奥様同伴で一度御逢い出来る日を祈って居ます比島に上陸した戦友の消息は別かりませんか生死を共にした人達と逢いたいね

南の島はもう暖かく成りましたでしょう臼杵でも近頃大(ママ)ぶん暖かい日が続く様に成りました半田さんも益々御元気で御逢い出来る日を待って居ますそれから半田さん班長はことわりますよ御互いに軍人ではないのですからではくれぐれも御身後大切に奥様にくれぐれもよろしく
半田様安東（安東猛）
（その後再会したときの二人の記念写真が、同じ封筒に収められていて、その裏書きに、安東－七十歳　半田－六五歳とある）

資料３
島尾敏雄海軍兵科予備学生（三期）が少尉任官したのが昭和十九年五月末。長崎県大村湾の川棚の臨時魚雷艇訓練所で訓練中であった。十九年の十一月に佐世保から奄美大島の基地に向かう。辰和丸という漁船で南下。（中央公論社島尾敏雄・吉田満『対談特攻体験と戦後』昭和五十三年９頁）

資料４
「戦艦大和の生還者が三千何百人の内に二割で、救助された後も、第一線の特攻勤務に志願された動機は？」の問いへの吉田満の回答。
「その後の勤務する上で、耐えやすいから。特攻で突っこむのが自分の運命というか、そいうふうに約束したんだから、そうしなくちゃならん、という気持ちがありましたね。だからおそらく、ある作戦でもって自分が生き残ったとしても、それでもう任務が終わったんだ、というふうにはなれないんじゃないですかね」（前掲書三十六頁）

資料５
「出撃するときに、貴重品ですね、時計とか、金とかいうものを、軍のゴムのサックに入れて懐にしまっていた男が、何人もいるんです。なんか、自分だけはね、もしかしたら‥‥‥というような。わりに歴戦の人に多いんですけどね。それで、奇妙なことに、われわれ生き残りは、あまりそういうことをやらなかったのが多い。妻子もなかったし、そんなこと何もやらなかったので、ほんとうに無一文で生き残ったですけども、やっぱり人間というのは、そこまでいっても、ほんとうに死を実感するというよりは、どこか、自分をはぐらかすようなところがありますね。」（吉田満の発言前掲書四十四頁）

資料６
「特攻隊に配属されていても、特攻にでないで、後に残るものもいる。実際に出かける特攻兵とそうでない連中とは違う。どうしても死ななければならなくなっている人間と、もしかしたら助かるかも知れないという人間とは違う。それから、死のすぐそばまで行っても、死なずに生き残ったのと、死んじゃったのとでは、やっぱりもう全く違う。」（島尾敏雄の発言前掲書四十七頁）

資料７
（１）山間部の敵国ゲリラにはふたつの大きなグループに分かれていた。マッカーサーの直属の「ユサッフェゲリラ」と、もうひとつは中部ルソン島に根拠地を置く「フクバラハップ（抗日人民軍）」であった。ユサッフェゲリラは、いずれアメリカ軍が進駐した暁には、過去にさかのぼって給料を支給されることになっていた。米軍のレイテ上陸後にユサッフェゲリラが激増したのも、これがひとつの因になっている。（『東南アジア現代史Ⅱ』山川出版１３７頁）

資料８
『The Discovery of the Igorots : Spanish Contacts with the Pagans of Northern Luzon』, QuezonCity. New Day Publishers. 1974
北ルソンの山地少数民族に対するスペインの侵略政策と住民の抵抗形態を描きだしたもの。この分野の先駆をなす業績である。（『東南アジア現代史』参考文献４１頁）